

『 On-line みんなで法華経を学ぼう! 』 vol.19

Oct. 2023

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .
(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 安楽行品第十四』 (迹門・流通分)

- 『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も
随喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁
終五行)
- 『其の習学せざる者は、これを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)
- 「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」
(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』) (法師品 二〇九頁三
行)
- 『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づく
ことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)
- 『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、
りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※ 表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



《勸持品の復習》

『種種に供養して身命を惜まざるべし』 (二三五頁 六行)

・不惜身命

(P162・終4行/P121・終7行)

★精神的な意味における「不惜身命」とはどんなことかと言いますと、「小我を捨てる」ことです。

★「小我」を捨てて「大我」に生きることであるという根本義を、心に刻んでおきたいものです。

・摩訶波闍波題比丘尼

(P171・終4行/P128・3行)

『何が故ぞ憂の色にして如来を視る』

(二三六頁 四行)

・耶輸陀羅比丘尼

(P179・終2行/P134・終2行)

『佛意に敬順し并に自ら本願を満ぜんと欲して～誓言を發さく』 (二三八頁 四行)

『皆是れ佛の威力ならん。唯願わくは世尊、他方に在すとも遙かに守護せられよ』 (二三八頁 七

行) **★すべて仏さまのお力によるものでございます。**どうぞ仏さまが他所におられても、私共をお守りください。

・二十行の偈 (P196・7行/P147・終4行)

日蓮聖人は「われこそ末法の世に法華經の教えを広める使命をもって生まれたものだ」という自覚を得られたといひます。また、この偈は、《法師品第十》の【衣・座・室の三軌】の実践を誓うものだと解釈されています。

・三類の強敵/俗衆増上慢 (P198・終2行/P149・終3行) (P222・終2行/P169・2行)

知りもしないのに、知っているかのように錯覚している増上慢の人々をさします。

・三類の強敵/道門増上慢 (P200・終4行/P151・2行) (P224・終4行/P170・6行)

仏道に入りながらつまらない教えを信じて、それを最高のものと思い込み、法華經を罵(の)ったり、その広まるのを邪魔するような人々を言ひます。

・三類の強敵/僭聖増上慢 (P201・6行/P152・1行) (P228・終行/P173・4行)

宗教界において高い地位にあり、世の尊敬を受けている人が、その状態に陶醉し、あるいはその地位を守ろうとして、真実の教えをないがしろにしたりする増上慢です。～若い頃はよく勉強もし、修行もしたことでしょう。ところが年を取ってしまうと、もうこれで十分だという気持ちを起こし、勉強や努力の心が鈍ってきたのです。

『是れ邪見の人 外道の論議を説くと謂わん』 (二三九頁 終三行)

・【衣・座・室の三軌】の実践

(P210・5行/P148・1行)

・★《如来の衣/柔和忍辱の心》の実践

『我等佛を敬うが故に 悉く是の諸惡を忍ばん』 (二三九頁 終三行)

『皆是れ佛なりと言われん～皆當に忍んで之を受くべし』 (二三九頁 終二行)

『我を罵詈毀辱せん 我等佛を敬信して 當に忍辱の鎧を着るべし』 (二四〇頁 一行)

『我身命を愛せず 但無上道を惜む』 (二四〇頁 三行)

『我等來世に於て 佛の所囑を護持せん』 (二四〇頁 四行)

『濁世の惡比丘は 佛の方便 隨宜所説の法を知らず』 (二四〇頁 四行)

『佛の告勅を念うが故に 皆當に是の事を忍ぶべし』 (二四〇頁 六行)

仏さまから『法華經』を広めることを託されたそのお言葉を大切に、私たちは迫害を耐え忍んでまいります』

・★《如来の室/大慈悲心》の実践

(二四〇頁 七行)

『諸の聚落・城邑に 其れ法を求むる者あらば 我皆其の所に到って 佛の所囑の法を説かん』

・★《如来の座/一切法空》の実践

『我は是れ世尊の使なり 衆に處するに畏る所なし 我當に善く法を説くべし 願わくは佛安穩に住したまえ』 (二四〇頁 終四行)

『我は是れ世尊の使なり』—世尊の使いであるからには、根本真理をしっかりと理解していなければなりません。その根本真理とは『諸法空』ということです。いわゆる『第一義空』です。



＜安樂行品のあらすじ＞

【文殊菩薩が、未来の惡世で『法華經』を説き広める際の『心構え』を願う】——

【二四一頁 一行】『勸持品』で菩薩たちが、未来の濁惡世(じよくあくせ)でどんな迫害にも耐

え忍んで法を広める決意をしたあと、**文殊菩薩**が釈尊に質問しました。

「世尊よ、ここにいる菩薩たちは稀(まれ)にみる尊い菩薩たちです。仏さまを心から敬い、従順(じゅうじゆん)で素直な心の持ち主です。悪世においても『法華経』をしっかりと護持し、読誦して、法を説き広める固い『誓い』を立てた者たちです」

【二四一頁 三行】「世尊よ。どうかお教え願います。／(『菩薩摩訶薩後(のち)の悪世に於て云何(いかに)してか能(よ)く是(こ)の經を説かん』) この菩薩たちが濁悪世(じよくあくせ)において法を説き広めるにあたり、『どのようにすれば良い』のでしょうか？『心構え』をお教えてください」とお尋ねしました。

【未来の悪世で『法華経』を説き広める際の『心構え』とは】――

【二四一頁 四行】**仏さま**は文殊菩薩の質問に対して、次のようにお答えになりました。

(『若し菩薩摩訶薩後(のち)の悪世に於て是(こ)の經を説かんと欲せば、當(まぎ)に四法(しほう)に安住すべし』)「陰悪な濁悪世(じよくあくせ)で、恐れなく自信をもって『法華経』を説くとするならば、次の『四つの基本的な心得』・【四安楽行・しあんらくぎょう】を心しなさい。これは①『身・しん安楽行』(行処ぎょうじよ・親近処しんこんじよ)、②『口・く安楽行』、③『意・い安楽行』、④『誓願・せいがん安楽行』の4つの信仰姿勢です」

【『法華経』を説く際の心構え① 『身安楽行(行処と親近処)』について】――

【二四一頁 六行】(『一には菩薩の行處(ぎょうじよ)・親近處(しんこんじよ)に安住して、能(よ)く衆生の爲に是(こ)の經を演説(えんぜつ)すべし』)「第一は『身』のふるまいを説く【身安楽行・しんあんらくぎょう】というものです。この【身安楽行】には ―― <<行処・ぎょうじよ>>と<<親近処・しんこんじよ>>があります。このことを大事にして、法華経を説く時の心構えとしなさい。具体的に言いますと・・・」

【まずは、<<身安楽行・しんあんらくぎょう>>の『行処・ぎょうじよ』について】<<――

【二四一頁 終四行】(『云何(いかに)なるをか菩薩摩訶薩の行處(ぎょうじよ)と名(なづ)くる』)

「<<行処・ぎょうじよ>>とは何かということ ―― 『菩薩としての身のふるまい』です。／(『柔和善順(にゅうわぜんじゆん)にして卒暴(そつぼう)ならず、心亦(こころまた)驚(おどろ)かず』) いつも『忍辱(にんにく)』というあらゆることに耐え忍ぶ心を持つことであり、自身の中から沸き起こる『邪心を抑える心』を持つことです。さらに『柔和善順(にゅうわぜんじゆん)』と言う柔和な心で『我』を張らず、教えに対して従順であり、『卒暴(そつぼう)』といって、むやみに驚かず、慌(あわ)てふためいたりしない落ち着きがあることです」

【二四一頁 終二行】(『諸法如實(しよほうにょじつ)の相を觀じ、亦(また)不分別(ふぶんべつ)を行ぜざる、是(こ)れを菩薩摩訶薩の行處(ぎょうじよ)と名(なづ)く』)「そして、常に物事の実相を捉えて『空』であることを観じること。すなわち、すべてが平等で、本来は一つであるということを観じていることです。しかし、平等という見方で留まるのではなく、それぞれの『違い』というものをしっかりと見極めていくことが大事です。(平等面ばかりにとらわれていたのでは、浮世離れした理論家に終わってしまい、実際に人を救うことはできません) ですから、＝ 全ては平等で区別しない、差別せずに平等でみるということ(『不分別を』)をしない(『行ぜざる』) ＝ ということが大事です。つまり、すべての現象は因縁によって『起こるべくして起こった』現象だと厳粛に受け止めることです。これによって現象の一つひ

とつに心を奪われることはなく、とらわれることもありません。これが『菩薩としての身のふるまい』の基本で、菩薩が踏み行なうべき大事な心構え「行処・ぎょうしょ」といいます」

【《身安楽行》の『親近処・しんこんしょ』の第一の重要な点。対人関係の在り方】——

【二四一頁 終行】（『云何（いか）なるをか菩薩摩訶薩の親行處（しんこんしょ）と名（なづ）くる』）

「次に、《親近処・しんこんしょ》とは何かということ —— これは、『対人関係の在り方』について説かれたものです。まず大切な①《親近処・しんこんしょ》の第一は、国王や王子、大臣という権力者に対して、『何かを求める心、下心』を持って近づかないことです。また、真の平和を目指していない他の宗教者や、悟ってもいないのに悟ったつもりでいる慢心（まんしん）の人、小乗の教えにとらわれている人にも親しく近づいてはなりません。【(偈)二四四頁 三行】（『破戒（はかい）の比丘名字（みょうじ）の羅漢（らかん）及び比丘尼の戲笑（けしやう）を好む者 深く五欲に著（じゃく）して 現の滅度を求むる 諸（もろもろ）の優婆夷（うぱい）に 皆（みな）親近（しんこん）することなかれ』）戒律を破る出家修行者、名前だけの阿羅漢（あらかん）、異性の修行者で戯（たわむ）れながら笑いかけて来る者、肉体的欲求から離れることができない異性の信仰者、現実世界を顧（かえり）みない浮世離（うきよはな）れした理想主義の在家信者などにも、慣（な）れ親しんではなりません」

【二四二頁 一行】「また、世俗的な物事に終始する文筆家、すべては物が第一とする唯物（ゆいぶつ）思想家、反対に極端すぎる唯心（ゆいしん）論者にも親しく接してはなりません。また、勝負事に明け暮れる博徒（ばくと）、無意味な格闘技を行う者、自分の力を誇示するためだけに相撲や力比べをする者、人の心を惑わすことを目的とする魔術師にも交際してはなりません。さらに他の生命を殺（あや）めることに快樂を覚え、それを職業とする者、家畜を育てて何の心の痛みもなく屠殺（とさつ）する人、ただ自分の利益だけを求めてむやみに狩獵（しゆりやう）する獵師（りやうし）と漁師（りやうし）、同じく何ら心の痛みもなく利得だけを考える食肉業者など、殺生を安易とする雰囲気に染まってははいけません」

【二四二頁 五行】（『是（かく）の如き人等（ひとら）或時（あるとき）に來（きた）らば、則（すなわ）ち爲（ため）に法を説いて憍望（けもう）する所なかれ』）「しかし、それらの者たちが法を求めて来たならば、丁寧（ていねい）に法を説いてください。その場合も大慈悲心から説くのであって、相手から利益を求めようという心」があってはなりません。

【《身安楽行》の『親近処』について — 修行者に向き合う際の注意事項】——

【二四二頁 五行】また、自分だけが救われ、自らが清ければ良いとしている出家・在家の修行者にも慣れ親しんでははいけません。そしてそのような者に対して法について問い質（ただ）すようなことも行ってはなりません。またその者たちの僧房（そうぼう）や、歩きながら思索をこらす経行（きやうぎやう）を行う場所、講堂にも一緒になるようなことは避けなければなりません。／（『或時（あるとき）に來（きた）らば宜（よろ）しきに隨（したが）って法を説いて憍求（けぐ）する所なかれ』）しかし、相手から法を求めて来たならば、相手の機根と時と場所を正しく判断して適切に法を説いてあげなさい。ただし、この場合も『何か利益を求めるような心』があってはなりません」

【(偈)二四四頁 終行】（『里（さと）に入（い）って乞食（こつじき）せんには一（ひと）りの比丘を將（ひき）いよ 若（も）し比丘なくんば一心に佛を念（ねん）ぜよ』）また、村里に入って托鉢（たくはつ）する時は、必ず他の比丘と一緒に行きなさい。一人だけで行ってはなりません。もし、そ

のような比丘がいなければ、一心に仏を念じていきなさい」

【《身安楽行》の『親近処・しんごんしょ』について — 異性に対するの注意事項】—

【二四二頁 八行】「文殊師利(もんじゆしり)よ。／ (『又(また)菩薩摩訶薩、女人の身に於(おい)て能(よ)く欲想(よくそう)を生ずる相を取って、爲(ため)に法を説くべからず』) 菩薩たる者は、特に男女間の在り方については殊の外(ことのほか)注意をしなければなりません。異性に法を説く時、相手に欲念(よくねん)を起こさせるような態度で法を説いてはなりません」
【(偈)二四四頁 七行】(『寡女(かによ)・処女(しよによ)及び諸(もろもろ)の不男(ふなん)に皆(みな)親近(しんごん)して以て親厚(しんこう)を爲(な)すことなかれ～女色(にょしき)を銜売(けんまい)する是(かく)の如きの人に皆(みな)親近(しんごん)することなかれ』)「もちろん異性を求めるような心で面談をしてはなりません。さらに、いかがわしい淫(みだら)な異性や売春業者の者などにも、慣(な)れ親しむようにつき合ってははいけません。／ (『獨(ひとり)他(た)の家に入らざれ。若(も)し因縁(いんげん)あつて獨(ひとり)入(い)ることを須(もち)いん時には但(ただ)一心に佛を念ぜよ』) また、一人きりで他人の家、異性の家に入ってははいけません。もし、どうしても一人で入らなければならない時は、『一心に仏を念じ』続け、『終始仏と共にある』ことを忘れてはなりません」

【(偈)二四四頁 終二行】(『獨(ひとり)屏處(びょうじょ)にして女(にょ)の爲に法を説くことなかれ 若(も)し法を説かん時には戲笑(けしやう)すること得(う)ることなかれ』)「そして男性にとっては、他から見えない所で、少女や乙女、寡婦(かふ・独り身の婦人)と二人きりになって法を説いてはいけません。もし、やむを得ずそうしなければならないときは、決して冗談を言ったり、笑ったりしてはなりません」

【二四三頁 一行】「やむを得ず、そうした場面で異性に向かって法を説く場合、／ (『齒(は)を露(あら)わにして笑(え)まざれ、胸臆(くおく)を現わさざれ』) 齒を見せて笑うような態度をしてはなりません。胸や胸元をはだけるような服装をしてはならず、法を説くからと言って、一線を越えるように馴(な)れ馴(な)れしく触れることもあってはいけません。そして、好んで年少の弟子や少年僧、かわいい子どもを身辺に置くことも慎みなさい。もちろん、年少の男子と一緒に学びたいなどという気持ちすら持ってはなりません」

【二四三頁 四行】(『常に坐禪(ざぜん)を好んで閑(しず)かなる處(ところ)に在(あ)つて其(そ)の心を修攝(しゆしやう)せよ』)「以上のことを慎むためにも、常に禪定の心でいなければなりません。坐禪することを心がけ、静かな所に身を置き、精神を統一する習慣を心がけることが大事です。／ (『文殊師利、是(こ)れを初(はじめ)の親近處(しんごんしょ)と名(なづ)く』) 文殊菩薩よ。これが菩薩としての基本中の基本としての対人関係の在り方で、最も慎むべき注意点です」
——以上、《親近処・しんごんしょ》の第一の留意点

【《身安楽行》の『親近処』の第二の重要な点。『実相・空』を観ること】—

【二四三頁 五行】次に『対人関係の注意すべき在り方』である②《親近処・しんごんしょ》の第二について説きます。／ (『一切の法を觀ずるに空(くう)なり、如實相(にょじつそう)なり』) それは菩薩が一切の物事をとらえるとき、この世界のあらゆるものごとは『空』であると観(み)ることで、すべての物事はありのままの相(すがた)であり、『逆さま』になって現われているものではありません。すべては本来、『動く』こともなく、『退く』こともなく、『転がり変化』しているものでもなく、現象がそのように現われるもの

ではありません。すべからく『縁起の法則』によって現われているものです。／（『虚空（こくう）の如くにして所有（しゅう）の性（しょう）なし』）すべての実体・実相は、あたかも『虚空』（こくう・『空間』）のようなものであって、目に見える形となって『固定的したもの』ではありません。実体はないのであります」

【二四三頁 七行】（『一切の語言（ごごん）の道（どう）斷（た）え、生（しょう）ぜず、出（しゅつ）ぜず、起（き）ぜず、名なく、相なく、實（じつ）に所有（しゅう）なし、無量・無邊（むへん）・無礙（むげ）・無障（むしょう）なり』）「皆さん。一切の物事の真相というものを『言葉によって説明を尽くす』ことはできません。それは『生じた』というものでもなければ『滅する』というものでもなく、ほかのものへ『変わっていく』ものでもなく、『出てきた』というものでもなく、いつまでもそのまま『在（あ）る』というものでもありません。『湧き起ってきた』ものでもありません。『名づける』こともできず、『実体のない』ものです。『量として測る』こともできなければ、『ここまでが実体で、ここまでが実体ではない』というものでもありません。『極限がある』という存在ではなく、何ものかに『遮（さえき）られ』、『妨（さまた）げられる』というような不自由性は全くありません。ただ『ひといろ』のすがたをもつものであります」

【二四三頁 八行】（『但（ただ）因縁を以（もつ）て有り、顛倒（てんどう）に従（よ）って生ず』）「この世のすべてのものごとは、ただ『因縁が合って存在している（因縁和して存在する）』のであり、すべては『仮のあらわれ』なのです。しかし人々は、あらゆる出来事、物事を顛倒（てんどう）したものの見方で見ると、その出来事も物も実体が、あたかもあるように見てしまうのです。そして自分勝手に好き嫌い、損得、自分なりの善悪で判断して受け止めてしまい、結局は、『苦の道』へと進んでしまうのです。／（『故（かるがゆえ）に説く、常に樂（ねが）って是（かく）の如（ごと）き法相（ほっそう）を觀ぜよ』）ですから私は、『常にすべてのものごとの**本当の相（すがた）を觀（み）なさい**』と説くのであります。／

【二四三頁 終四行】（『是（これ）を菩薩摩訶薩の第二の親近處（しんこんじょ）と名（な）づ（く）』）／【（偈）二四五頁 二行】（『是（こ）れ則（すなわ）ち名（な）づ（けて）行處（ぎょうじょ）・近處（こんじょ）とす此（こ）の二處（にしよ）を以（もつ）て能（よ）く安樂（あんらく）に説け』）文殊菩薩よ。このようにあらゆる出来事を現象にとらわれない『**本当の相（すがた）を觀（み）る**』ことが、『**対人関係の注意すべき在り方**』を示す菩薩の対人関係・**《親近處・しんこんじょ》**の第二の心得です」

【《身安樂行》の『親近處』の第二の重要な点、『実相・空』で觀ることを『偈』で強調】——

【（偈）二四五頁 三行】（『又復（またまた）上中下（じょうちゅうげ）の法有爲（うい）・無爲（むい）實（じつ）・不實（ふじつ）の法を行ぜざれ』）「ですから、菩薩乘（ぼさつじょう）・緣覺乘（えんがくじょう）・聲聞乘（しょうもんじょう）と分け隔（へだ）てて、どの教えが尊い、どの教えが尊くないなどと差別とこだわりをもって法を説いてはなりません。すべてを包括（ほうかつ）した**一仏乗こそ、全ての行い・実践の基盤**としなければならないのです。【（偈）二四五頁 三行】（『亦（また）是（こ）れ男（なん）是（こ）れ女（にょ）と分別（ぶんべつ）せざれ』）また、この人は男だから、この人は女だからというような**性差別**をしてはなりません。これは本質・実相をわかってないためにそのような過ちをおかすのです。常に**人間としての本質に目を向けていく**ことが大事です。すべての**現象の枝葉末節（しやうまつせつ）にとらわれてはなりません**。

【（偈）二四五頁 四行】（『諸法を得ず知らず見ず』）菩薩たるもの、ものごとの本質を知って、**一つひとつを判断していなければなりません**。これは、菩薩として振る舞う大事な心得です」

【(偈)二四五頁 五行】 (『一切の諸法は空(くう)にして所有(しょう)なし常住(じょうじゅう)あることなく亦(また)起滅(きめつ)なし是(こ)れを智者(ちしゃ)の所(しょ)親近處(しんこんしょ)と名(なづ)く』)「一切の現象の本質は、『空』であって固定したものではありません。いつまでも変化せず、そのまま変わりなく在(あ)るものでもなく、生じたり滅したりするものではありません。ですから智慧ある人は、この『空』の悟りを基盤として、ものごとを決めず、全ての人に平等に接していく心得を持たなければなりません。これが貝えるべき<<親近処>>です」

【(偈)二四五頁 六行】 (『顛倒(てんどう)して諸法は有(う)なり無なり是(こ)れ實(じつ)なり非實(ひじつ)なり是(こ)れ生なり非生(ひしょう)なりと分別す閑(しず)かなる處(ところ)に在(あ)って其(そ)の心を修攝(しゅしやく)し安住して動ぜざること須彌山(しゅみせん)の如くせよ』)

「凡夫は、ものごとを顛倒(てんどう)した目で見るため、ものごとには実体があるように見えてしまいます。つまり『有(う)・差別、違いがあって存在する』とか『無』であるとか、これは『実在する』とか『実在しない』とか、『生じたもの』とか、『生じたものではない』と見えてしまい、決め付けてしまうのです。そのような顛倒(てんどう)したものの見方から離れていなければなりません。目の前の現象に惑(まど)わされない静かな境地に精神を統一し、あたかもこの世の最も高い山である『須彌山(しゅみせん)』のような最高にして不動の心で全ての物事を達観(たっかん)して、すべては『空』であると悟る境地に徹していなければなりません。【(偈)二四五頁 九行】 (『一切の法を觀(かん)ずるに皆(みな)所有(しょう)無し猶(な)お虚空(こくう)の如し堅固(けんご)なることあることなし』) この世の一切の物事は、つまるところ『縁起の法則』によって等しく存在しているものであり、固定的・永続的なものは何一つなく実体のないものです。ちょうど虚空のようなものです。【(偈)二四五頁 終三行】 (『常住(じょうじゅう)にして一相(いっそう)なり是(こ)れを近處(こんしょ)と名(なづ)く』) すべては常に『ただひとつ』の相(すがた)を持つものであります。これが菩薩が心得るべき<<親近処>>の大事な点です」

—— 以上、<<親近処・しんこんしょ>>の第二の留意点

【『身安楽行(行処と親近処)』を行ずることによって得る功德】——

【(偈)二四五頁 終二行】 (『若(も)し比丘(びく)あつて我が滅後に於(おい)て是(こ)の行處(ぎょうしょ)及び親近處(しんこんしょ)に入(い)つて斯(こ)の經を説かん時には怯弱(こうにやく)あることなけん』)「もし出家修行者が、私の滅後において、以上のことを踏(ふ)まえて法華經を説くならば、どのような事態に遭遇(そうぐう)しても堂々と自信を持つことができ、決して心がひるむことはありません。【(偈)二四五頁 終行】 (『菩薩時あつて静室(じょうしつ)に入(い)り正憶念(しょうおくねん)を以(も)つて諸(もろもろ)の國王(こくわう)の爲に開化(かいけ)し演暢(えんちょう)して斯(こ)の經典を説かば其(そ)の心(こころ)安穩(あんのん)にして怯弱(こうにやく)あることなけん』) 菩薩たる者、時には静かな部屋に入って、思考を定め、正しい記憶に基づいて法華經の教えの内容をかみしめていなければなりません。このような禅定の境地を経て、国王などの権力者・権力者に従う者・知識人や他の宗教者に法華經の真意を分かりやすく説くならば、心は決してひるむことなく安定し、氣後れ(きおくれ)するようなことに陥(おちい)ることはありません」

【(偈)二四六頁 三行】 「文殊菩薩よ。以上が、菩薩が悪世で『法華經』を説き広める際の『心

構え』の第一である、【身安楽行・しんあんらくぎょう】というものです」

—— 第一の心得 ①【身安楽行・しんあんらくぎょう】《行処》と《親近処》

【『法華経』を説く際の心構え ②『口安楽行・くあんらくぎょう』について】——

【二四六頁 五行】「文殊師利(もんじゆしり)よ。つぎに第二の心得として、『口』のふるまいである②《口安楽行・くあんらくぎょう》について説きます」

「それは、法を説く時や經典を読む時、／(『樂(ねが)って人及び經典の過(とが)を説かざれ』) 好んで人の欠点を指摘したり、經典のあら捜しをするようにして法を説き、読んだりしてはいけません。／(『亦(また)諸餘(しよよ)の法師を輕慢(きやうまん)せざれ。他人の好惡(こうあく)長短(ちやうたん)を説かざれ』) また教えを説く人を、輕蔑(けいべつ)してはなりません。そして他人の善(よ)し悪(あ)し、長所や短所をあげつらって批判してはいけません。出家行者である声聞たちの過(あやま)ちを、名をあげて非難してはなりません。反対にその美点を、名をあげて誉(ほ)め、ゴマをするようなこともあってはなりません。当然、敵視して見ることもあってはなりません。」

【二四六頁 終四行】(『善(よ)く是(か)の如き安樂の心を修するが故に、諸(もろもろ)の聽(き)くことあらん者其(もの)の意(こころ)に逆(さから)わじ』)「このように安らかな心で法を説くことを身に具えているならば、その人が説く教えは、全ての人々に『反感』を招くことはなく、素直に教えを聞き入れていくでしょう。もし人々が難しい質問をしてくるようであれば、決して小乗の教えに基づいて答えてはなりません。／(『但(ただ)大乘を以(も)つて爲に解説(げせつ)して一切種智(いっさいしゆち)を得せしめよ』) 必ず大乘の教えに基づいて、すべては平等であるという『平等相』と、一つひとつの違いをしっかりと見極める『差別相』を見通す智慧を得るように導かなければなりません」

【(偈)二四七頁 一行】「菩薩たちよ。あなたたちは常に心安らかにして、また体も健康であって法を説かなければなりません。邪心や怒りもなく、しかも清潔な場所で法座を開き、体に油を塗るといふいわば身なりをきっちりとして、周りの人々に不快を与えない身ぎれいさがが必要です。／(『内外俱(とも)に淨(きよ)くして法座に安處(あんじよ)して問(とい)に隨(したが)って爲(ため)に説け』) つまり内外共に安らかで穏やかさに包まれた状態で法座を開くなど、法を説かなければなりません。もし男女の出家・在家の修行者や国王・王子・家臣・市民など様々な人に法を説く時は、(『微妙(みみょう)の義を以(も)つて和顏(わげん)にして爲に説け』) 終始穏(おだ)やかな態度で、この難しい教えの内容を人々の心に染み入るように説かねばなりません。もし、難しい質問をしてきたならば、／(『義に隨(したが)って答えよ 因縁・譬諭(ひゆ)をもって敷演(ふえん)し分別(ふんべつ)せよ』) 必ず仏教の本義に基づいて答え、しっかりと『理論・法説』を説き、あわせて『警え』と『体験談』を取り入れて説き示すことを忘れてはなりません。そして、それによってすべての人が最高の悟りを求めるように起こさしめ、一人ひとりに相應(ふさわ)しく功德が得られるように、段々と真の悟りへと導くようにしなければなりません」

【(偈)二四七頁 七行】(『懶惰(らんだ)の意(こころ)及び懈怠(けたい)の想(おも)を除き諸(もろもろ)の憂惱(うのう)を離れて慈心(じしん)をもって法を説け』)「その時の姿勢は、面倒くさいとか、飽(あ)き飽(あ)きする心で向き合うのではなく、相手の心配事や悩み事が解き放たれるように願い、慈悲心を以(も)つて法を説きなさい。昼となく夜となく、常に最高の悟りに達する無上道の教えを説きなさい。最高の教えを『警え』や『体験談』を交えて一般の人々がわかるよう

に説き、／（『衆生に開示して咸（ことごと）く歡喜（かんぎ）せしめよ』）すべての人々に大いなる喜びを与えるように努めなければなりません」

【(偈)二四七頁 九行】「法を説くことで、見返りを求めてはいけません。衣服や寝具、飲食物や医薬など物を欲するに供養を求める心を起こしてはなりません。／（『但（ただ）一心に説法の因縁を念じ佛道を成（じょう）じて衆をして亦爾（またしか）ならしめんと願うべし是（こ）れ則（すなわ）ち大利（だいに）安樂の供養なり』）**ただ一心に、法を説くことだけに専念し、なぜ法を説かなければならないかという法を説く目的を純粹に考え、自他ともに仏道を成就することだけを願いなさい。これこそが最大の功德であり、自分自身に対して最も安樂をもたらす供養にほかなりません**」

【②『口安樂行・くあんらくぎょう』を行わずに得る功德】——

【(偈)二四七頁 終行】「私の滅後、以上のような心がまえて法華經を説くならば、／（『心に嫉恚（しつち）諸惱（しよのう）障礙（しやうげ）なく亦（また）憂愁（うしゅう）及び罵詈（めり）する者なく又（また）怖畏（ふい）し刀杖（とうじやう）を加えられる等（とう）なく亦（また）擯出（ひんずい）せらるることなけん忍（にん）に安住するが故に』）**嫉（ねた）みや恚（いかり・怒り）など悩みの元となる心が一切なくなり、その結果、憂（うれ）いや愁（かな）しみもなくなってしまう。そして人から罵（のの）しられ、脅迫（きょうはく）や迫害を加えられることなどなく、仲間はずれや、追放の憂（う）き目にあうこともありません。なぜならば、その人は『忍辱』の境地に達しているからであります。そして『智慧』ある人が、以上のような心得を保つことができるならば、必ず安らかに菩薩行を実践できることは、すでに私が説いてきた通りであります。／（『其（そ）の人の功德は千萬億劫（まんのかう）に算數譬論（さんじゆひゆ）をもって説くとも盡（つ）くすこと能（あた）わじ』）その人の功德は誠に大きく、千万億劫という計り知れない長い期間をかけて、どんなに数え上げて譬（たと）えても、表現し尽くすことができないほど甚大です」**

—— 第二の心得 ②【口安樂行 くあんらくぎょう】

【『法華經』を説く際の心構え ③『意安樂行・いあんらくぎょう』について】——

「文殊師利（もんじゆしり）よ。つぎに第三の心得として、『心』の持ち方である**③<<意安樂行・いあんらくぎょう>>**を守らなければなりません」

【(二四八頁 六行)】「文殊師利（もんじゆしり）よ。仏法が忘れ去られようとする末世に於いて、菩薩たちが法華經を信受し、經典を学ぼうとするならば、まず、他を妬（ねた）み、諂（へつ）らったり、こじつけをするような心、自分自身のみならず人をも欺（あざむ）くような心があってはなりません。また教えを実践し、仏道を成し遂（と）げようと精進している人を、輕蔑（けいべつ）し、罵（のの）しり、／（『其（そ）の長短（ちやうたん）を求むることなかれ』）その人の長所・短所をあげつらって論じてはなりません。【(偈)二五〇頁 一行】（『常に質直（しちぢき）の行（ぎやう）を修（しゆ）すべし』）そして、**常に誠実で素直な心を以て法を説かなければなりません**」

【(二四八頁 八行)】「もし、出家・在家の修行者が、それぞれ声聞・縁覺・菩薩の境地を目指して精進しているのを見て、『おまえたちが目指している目的と修行の在り方は本物ではない。本来の修行の目的からまったく外（はず）れている。だから悟りを得ることができない』などと言って輕蔑し、相手に不安と疑いを持たせるようなことがあって

はなりません。しかも、いたずらに法論を戦わして争ってはなりません」

【二四九頁 一行】『當(まさ)に一切衆生に於(おい)て大悲の想(おもい)を起(おこ)し、諸(もろもろ)の如來に於て慈父の想(おもい)を起し、諸(もろもろ)の菩薩に於て大師(だいし)の想(おもい)を起すべし』「菩薩が法華經を説く時、常に柔和(にゅうわ)な心を持ち、そしてさまざまな困難に遭遇(そうぐう)しても耐え忍び、一切の衆生に対して慈悲心を忘れてはなりません。そして、一切の衆生に対しては、苦しみや悲しみを取り除いてあげようという『大悲』の心で接し、諸仏に対しては、私を慈悲で包み込む『慈父』のお方として、また菩薩に対しては、私の素晴らしい先生『大師・だいし』だという思いを持ち、／『十方の諸(もろもろ)の大菩薩に於て常に深心(じんしん)に恭敬(くぎょう)・禮拜(らいはい)すべし』そして十方世界のあらゆる大菩薩に対しては、常に心の底から尊び敬い、礼拝しなければなりません」

【二四九頁 三行】『一切衆生に於て平等に法を説け。法に順ずるを以ての故に多くもせず少(すくな)くもせざれ。乃至(ないし)深く法を愛せん者にも亦(また)爲(ため)に多く説かざれ』「一切衆生に対して、『平等』に法を説かなければなりません。法に純粹に従い、余分なことを言わず、反対に言葉足らずでもいけません。また、深く信じている人だからと言って鼻負(ひいき)して多弁(たべん)を弄(ろう)し、余計なものまでつけ加えて法を説いてはなりません。【(備)二五〇頁 三行】『一切を慈悲して懈怠(けたい)の心を生ぜざれ』すべからく慈悲心をもって臨むものであり、『面倒くさいとか、今日は疲れたからやめよう』などと思ってはなりません」

【㊦『意安樂行・いあんらくぎょう』を行わずに得る功德】——

【二四九頁 五行】「文殊師利(もんじゆしり)よ。仏法が忘れ去られようとする未来世において、この《意安樂行・いあんらくぎょう》を守る者は、法華經を説く時、心が乱(みだ)れ、恐れ悩まされるようなことにはなりません。法華經を説き広める同じ志(こころざし)を持つ人々と共に、この教えを学ぶことを深めることができるばかりでなく、／『亦(また)大衆(だいしゆ)の而(しか)も來(き)て聽受(ちやうじゆ)し』教えを聞く者があなたのもとに数多く集まって来るでしょう。そしてそれらの人々は教えをしっかりと信受し、よく誦(そら)んじ、よく人のために教えを説き、よく書写し、そしてその經典を敬い、尊び、讚歎(さんたん)することでありましょう。【(備)二五〇頁 七行】『無量の衆(しゆ)に敬(うやま)われん』そればかりではありません。無数の人々から敬われることになるでありましょう」

—— 第三の心得 ㊦【意安樂行 いあんらくぎょう】

【『法華經』を説く際の心構え ㊦『誓願安樂行・いせいがんあんらくぎょう』について】——

【二五〇頁 八行】「文殊師利(もんじゆしり)よ。つぎに第四の心得として、『誓願』を起こすことの大切さを示す㊦<<誓願安樂行・せいがんあんらくぎょう>>を守らなければなりません」

「文殊師利(もんじゆしり)よ。仏法が忘れさらられようとする末世に於いて、法華經を受持する菩薩は、在家・出家の修行者に対して、その人々の苦しみを取り除かせていただきたいと願う『大悲』の心を持たなければなりません。そして次のように『決意』することが大切です。それは『世の多くの人々は、仏が説き示す《方便》の眞の意味を解らず、《法華經の神髓(しんずい)》を知らないでいる。しかも法華經の教えを聞こうともしないために、信じること自体ができないでいる。しかし、今は法華經を聞き、信解すること

ができなくても、自分が悟りを得た暁(あかつき)には、／(『何(いず)れの地に在(あ)っても、神通力、智慧力を以て、之(これ)を引いて是(こ)の法の中に住することを得せしめん』) どんな土地に自分がいようと、仏の《神通力》と《智慧》の力をもって多くの人々を導き、必ず法華經に導き入れる!』と『誓い』を持つことが大切なのです」

【④『誓願安樂行・せいがん あんらくぎょう』を行わずに得る功德】——

【二五一頁二行】「文殊師利(もんじゆしり)よ。如来の滅後において、以上の四番目の心得である《誓願安樂行・せいがん あんらくぎょう》を守る者は、／(『是(こ)の法を説かん時(とき)過失(かじつ)あることなけん』) 法華經を説く時に過(あやま)ちをおかすことはありません。常に出家・在家の修行者や国王をはじめとする権力者、一般大衆、他の宗教者、有識者たちから供養され、尊敬され、讚歎(さんたん)されるであります。／(『虚空(こくう)の諸天、法を聽(き)かんが爲(ゆえ)の故(ゆえ)に亦(また)常に隨侍(ずいじ)せん』) 天上界に住む神々も、教えを聞くためにその菩薩から片時(かたとき)も離れることはありません。また村里(むらさと)や街や都市部にいる時も、人気のない場所や林の中で、人から難しい質問を投げかけられても、その菩薩は窮地に立たされることはなく、／(『諸天晝夜(ちゆうや)に常に法の爲(ため)の故(ゆえ)に而(しか)も之(これ)を衛護(えいご)し、能(よ)く聽者(ちようじゃ)をして皆(みな)觀喜(かんぎ)することを得せしめん』) 神々は晝夜を分かたず守護し、教えを聴聞(ちようもん)する人々を満足させ、感銘と喜びが得られるよう守ってくれます。こうしたことが何故起きるかと言えば、／(『此の經は是(こ)れ一切の過去・未來・現在の諸佛の神力をもって護(まも)りたもう所なるが故(ゆえ)に』) この法華經は過去・現在・未來の三世の諸仏の神力によって守られているからであります。文殊師利(もんじゆしり)よ。この法華經は無数の国々のいずれに於いてでも、その名を聞くことすら稀(まれ)なことであります。ましてやそれに巡り合い、法華經の教えを受持し読誦することはなおさら難しく、貴重なことであります」

—— 第四の心得 ④【誓願安樂行 せいがん あんらくぎょう】

【『髻中明珠(けちゆうみよしゆ)の譬え』】——

以上の法華經を説く時の心得を説き終えると、世尊は《法華七喻(ほっけ しちゆ)》の六番目の譬え話である『髻中明珠(けちゆうみよしゆ)の譬え』を説き、なぜ法華經をこれまで説かなかったのか？(法華經をなかなか説かなかったのかの理由)を説き明かされたのでした。

その譬え話は、次のようなたとえ話です。——

【二五一頁 終行】【(偈)二五四頁 五行】「大變強い戦力を持つ大王がいました。大王は周囲の国々を治め、その威光(いこう)を示して服従させようとしてしました。しかし周囲の小国の王たちは、その大王の命令に従わなかったとしましょう。

すると大王は様々な軍隊を送り、従わない王たちを討伐(とうばつ)しました。そして数々の戦(いくさ)で手柄(てがら)を立てた将兵を見ると、大王は大いに喜び、その功績に応じてさまざまな賞を与えました。ある者には田畑・家・村・都市・城を、ある者には衣服・貴金属・宝石・車・象・馬・下僕(げぼく)・人民を与えました。しかし、大王の髻(まげ)の中に結(ゆ)い込めている大變貴重な『宝玉(ほうぎょく)』だけは、なかなか与えませんでした。それはなぜかと言えば、その宝玉だけが王の頭上の中に秘匿

(ひとく) している最も尊いものであったからです。

もしその宝玉を与えたならば、それを授かった者も、それを見たほかの家来たちも皆、驚き当惑(とうわく)するばかりでありましょう。しかし大王は最も大変な難事を成し遂(と)げた勇敢(ゆうかん)な将兵に対してのみ、髻(まげ)の中にあるこの秘匿(ひとく)している『**宝玉(ほうぎょく)**』を与えたのでした。如来とはちょうどその大王のような者であり、**法華経**はまさにその『**宝玉**』のようなものであります」・・・と。

譬えをもって法華経が説かれることの貴重さを説かれたのでした。

—— 以上、【**髻中明珠(けちゅうみょうしゅ)の譬え**】

【『**法華経**』をこれまで説かなかった理由】——

・・・世尊は言葉を続けられます。

【二二頁 七行】「まさに如来はこの譬え話の大王のようなものです。禅定と智慧の力をもって『法の国土』を治めている『**三界の王**』です。そして大王の命令に服従しない『**小国の王**』とは、**諸々の『魔王』**を示し、人間が持つ様々な『**根強い煩惱**』を意味するもので、如来の『**教えに反抗する姿**』をあらわしたものです。ですからこの大王に仕えて勇敢に戦った将兵とは、すなわち教えを受持する**多くの仏弟子、皆さんのこと**なのであります」

【二二頁 八行】「『**小国の王**』すなわち『**魔王**』と奮戦(ふんせん)するありさまを見ると、如来は心から嬉しく思い、多くの人々に様々な教えを説いて励ましたのであります。そしてその戦いに勝った褒賞(ほうしょう・ごほうび)として、精神が安定して同様な『**禅定**』の境地、あらゆる人生苦から解放された境地、**煩惱**を除き尽す**大本**となる**強い信心**を与えたのであります。これによってその人たちは全ての苦惱から救われ、理想に向けて心が引き寄せられる**法悦**を得ることができたのでした。／(『而(しか)も爲に是(こ)の法華経を説かず』)しかし、**法華経だけは、まだ説かなかった**のであります」

【(偈)二五四頁 終四行】(『爲(こ)れ諸法の王 忍辱の大力(だいき) 智慧の寶蔵(ほうぞう)あり 大慈悲を以て法の如く世を化(け)す』)「如来は**全ての教えの王**であり、強い忍辱の力と深い智慧、そして広い大慈悲心をもつ、教えによってこの世を支配し善導します。一切の人々が苦しみ悩みから解脱(げだつ)しようとする内外の魔と戦う姿を見て、如来は衆生に**的確な方便力**を用いて様々な法を説くのです。【(偈)二五四頁 終行】(『既(すで)に衆生其(そ)の力を得(え)已(おわ)んぬと知っては 末後(まつご)に乃(すなわ)ち爲(ため)に是(こ)の法華を説くこと 王(お)う)髻(もとどり)の明珠(みょうしゅ)を解(と)いて之(これ)を與(あた)えんが如し』)そして、**人々が真理を受け止めるにふさわしい境地に達したことを見届けて、如来は最後に『法華経』を説くのであります**。まさに大王が大事に髻(まげ)の中に結(ゆ)い込めている**宝玉(ほうぎょく)**を与えるのと同じであります」

【二二頁 終行】「**文殊師利(もんじゆしり)よ**。もしその将兵のなかで、誰もできないような最高の**大手柄(おおてがら)**を立てた者がいたとします。その時、大王は大変喜び、これまで長い間、自身の髻(まげ)の中に結い込めていて、滅多(めった)に人に与えなかった信じがたいほどの価値がある**宝玉(ほうぎょく)**をその勇者に与えるであります。今、こうして法華経を説くことも同じで、如来はその大王と同じであります。／(『**三毒**

（さんどく）を滅し三界を出（い）でて魔網（まもう）を破（は）するを見ては、爾（そ）の時に如来亦（また）大（おお）に歡喜（かんぎ）して、此の法華經の能（よ）く衆生をして一切智（いっさいち）に至らしめ）如来は三界（生死流轉する『悩みの世界』）の『**大法王**』であり、法によってあらゆる人々を教化します。そして優（すぐ）れた仏弟子たちが、物質世界における悩み・精神世界における悩み・煩惱や死に対する悩みと戦って勝利し、『**貪・瞋・痴（とんじんち）**』の**三毒**を滅して、網のように張りめぐらされた『**迷いの世界**』から抜け出せたことを如来が見極めた時、如来は大いに喜んで、この『**法華經**』を説くのです」

【二五三頁 五行】『**法華經**』は、すべての人にこの世の一切の**実相を知る『智慧』**を与える教えです。しかし、世間の人々にとっては理解しがたく信受できない教えであり、／
（『先に未だ説かざる所なるを而（しか）も今之（いまこれ）を説く』）これまで説かれることがなかった難しい教えです。その得難い教えである『**法華經**』を、**今、説くのです**」

【二五三頁 七行】（『此の法華經は是（こ）れ諸（もろもろ）の如来の第一の説、諸説の中に於（おい）て最も爲（こ）れ甚深（じんじん）なり』）『**文殊師利（もんじゅしり）**よ。この『**法華經**』は、如来のすべての教えの中で**最高の教えであり、最も奥深い教え**です。『法華經』をこうして最後に説くのは、強い勢力を持つ『**大王**』が長い期間、大事に秘蔵していた**宝玉（ほうぎょく）**を最後に与えるのと同じです。**文殊師利**よ。この『**法華經**』は諸仏が最も大事に秘匿（ひとく）していた**奥義（おうぎ）**の教えです。そして**すべての教えの中で最高最上の教え**であり、諸仏が長い間しっかりと護（まも）り、滅多に説くことがなかった教えです。／
（『始めて今日（こんにち）に於（おい）て乃（すなわ）ち汝等（なんだち）がために而（しか）も之（これ）を敷演（ふえん）す』）【（偈）二五五頁 二行】（『此の經は爲（こ）れ尊（そん）衆經（しゅきょう）の中の上（かみ）なり我常に守護して妄（みだ）りに開示せず今正（まじ）しく是（こ）れ時なり汝等（なんだち）が爲に説く』）それを世に広めるために、**今日初めて皆さんに説くのです**」

【《四つの安樂行》をもって『法華經』を説き広めよ】——

【（偈）二五四頁 一行】『**菩薩**たちよ。周囲の条件や環境に左右されない『**忍耐**』の心を常に持ち、／
（『一切を哀慙（あいみん）して』）この世に存在する一切のものを『**哀れむ**』心をもって、諸仏が讚歎するこの『**法華經**』を説き広めなさい。仏法が忘れ去られようとする末世において、この『**法華經**』を護持する者は、この教えを知らない在家・出家の修行者や菩薩行を實踐しない人々に対して、【（偈）二五四頁 三行】／
（『慈悲を生ずべし斯（こ）れ等（ら）是（こ）の經を聞かず信ぜず則（すなわ）ち爲（こ）れ大（おお）に失えり～諸（もろもろ）の方便を以て其（そ）の中に住せしめん』）『**慈悲の心を起こしなさい。この人たちは、教えを聞いたことがないために教えを信じようとしない**ている。これはその人にとっては大きな**損失**だ。だから『**仏の悟り**』の教えを頂いている自分は、その人々に様々な方便を用いて教えを説き、この教えに基づいた人生を歩んでいただけるように導こう』という『**慈悲の心**』で接しなければならないのです」

【《四つの安樂行》を行なう者が得る功德】——

【（偈）二五五頁 三行】『私の滅後の世に於いて、仏の悟りを得ようと願い求める者が、心身共に安らかに法を説くことを願うのであれば、以上に述べた【**身・しん 安樂行**】、【**口・く 安樂行**】、【**意・い 安樂行**】、【**誓願・せいがん 安樂行**】の四つを心得を身に具えていなければなりません。そしてこの四つの安樂行を完全に行えば、次のような功德を得るでしょう。

／ 『常に憂悩(うのう)なく、又病痛(びょうつう)なく、顔色(げんしき)鮮白(せんびやく)ならん、貧窮(びんぐ)・卑賤(ひせん)醜陋(しゅうる)に生(いま)れじ』 それは常に憂いや悩みがなく、病気に苦しむこともなく、顔色も白く美しく輝き、経済的に苦しむこともなく、人から蔑(さげす)まされたり、醜(みにく)くなったりする人生を送ることはありません。【(偈)二五五頁 六行】 『衆生見んと樂(ねが)うこと、賢聖(げんじょう)を慕(した)うが如くならん』 世の人々はあたかも賢人(けんじん)・聖人としてあなたを慕うでしょう。また天上界の純真な童子たちも、その人に仕(つか)えたいと願い出てくるであります。その人を刀や杖や棒で暴行し、迫害しようとしても不可能であり、毒をもって害しようとしてもそれはできなくなります。また、その人を罵(ののし)る人がいたならば、その罵る者は口が塞(ふさ)がってしまうであります。そして『安樂行』を行ずる人は、どこへ行っても、どのような環境のもとに置かれようとも。【(偈)二五五頁 八行】 『遊行(ゆぎょう)するに畏(おそ)れなきこと、師子王(ししおう)の如く、智慧の光明(ごうみょう)日の照すが如くならん』 心がいつもとらわれがなく『自由自在』で、獅子が悠然(ゆうぜん)と歩くように堂々としています。それはあたかも日光が光り輝くようであり、『智慧』の光によって迷いの暗黒を晴らします」

【《四つの安樂行》を行なう者が見る『夢』】——

【(偈)二五五頁 終三行】 『安樂行』を行じる人は、次のような『夢』を見るであります。諸仏が尊い獅子座に座り、多くの修行者に囲まれて説法するお姿を見るでしょう。また次に自分が説法座に着き、法を説く自分に対して、さまざまな龍神や鬼神や無数の生きとし生けるものから敬われ、合掌される姿を見るでしょう。黄金に輝く諸仏が無数の光の矢を放ち、この世の全てを照らし出し、美しく響きわたる声で法を説くお姿を見ることでしょう。そして自分はその仏さまを直(じか)に合掌し、敬い讃(たた)え、教を聞いて歡喜し、諸仏に感謝のまことを捧げる姿を見ます。さらに聞いた教を忘れることはなく、悪をとどめ、善を為(な)す力を得て、決して後戻りすることなく仏の悟りを得る道を歩んでいきます。そして仏さまはあなたに対して、／ 『無量智(むりょうち)の佛の大道(だいたう)を得て、國土(こくど)嚴淨(ごんじょう)にして廣大(こうだい)なること比(たぐい)なく、亦(また)四衆(ししゅう)あり、合掌して法を聽(き)くべしとのたもうを見ん』 『将来必ず、大いなる仏の悟りを得ることができ、そなたが教化する国は清く美しく広大で、多くの修行者たちが合掌して、そなたが説く教を一心に聞くであろう』 と成仏の保証の記を授け、そういうあなたの未来世の姿を仰(おお)せになるでしょう。また、自分自身は静かな林の中で正しい教を修行し、この世の『実相』を悟り、深く禅定に入って十方世界の諸仏を拜する姿を夢見るであります。黄金の光を放つ福相に満ちた諸仏から教を聞き、その教をあなたが多くの人々に説く姿を見るでしょう」

【(偈)二五六頁 終二行】 「さらに次の夢も見ます。国王に生まれて、宮殿、家臣、最上の生活、そして自身のすべての欲望を打ち捨てて、修行の道に入って行きます。その後、菩提樹のもとの獅子座に端座(たんざ)し、七日間にして仏の智慧を悟ります。そして計り知れない年月の間、衆生や在家・出家の修行者に法を説き続け、最終的には最上の教である『法華經』を説きます。そうして無数の衆生を救い切って、／ 『後(のち)に當(まき)に涅槃(ねはん)に入(い)ること、煙盡(けむりつ)きて燈(ひ)の滅(き)ゆるが如し』 そののち、油が消えるがごとくその命を閉じる姿を夢に見るでしょう」

【(偈)二五七頁 四行】 「もし、のちの世の悪世において、仏の第一の教である『法華經』を、

以上に述べた『四つの安楽行』の心得に基づいて説くならば、その人はこのような大いなる功德を得ることができるのであります」

※「勸持品」は、外からの迫害に対する忍耐を誓う章。 (P234・3行/P177・終2行)

「安楽行品」は、内からの誘惑や迷いの克服を教える章。(安楽行品と勸持品は表裏一体)



あんらくぎょう 安楽行とは

(P234・終5行/P178・4行)

第一は、「いつも安らかな心で、自ら楽(ねが)って行をなせ」。

第二は、法華経を心から信じ、実践していけば「安楽な人生」を送ることができる。

色心不二(しきしんふに)でありますから、心が安らかであれば、それは必ず身体も生活もすべて安らかになる。この品ではこのことを固く保証してくださっています。

《患惟のひととき ①》

庭野開祖は「①自ら楽(ねが)って行をなせ。外からの迫害や困難に耐えるのはまだ初心の人である。②『色心不二』なのだから、法華経を通して『心が安らか』になれば、⇒ 身体も、生活の『全てが安らか』になる」と説いています。

— では私は、①「精進を自ら楽(ねが)って行っている」か？

②『色心不二』についてどのように受け止めるか？ ふりかえってみましょう。

しあんらくぎょう 四安楽行

(P239・終行/P182・7行)

四安楽行とは— 末世において法を説くに際しての『四つの基本的な心得』

「身安楽行」— 自分の身を処するうえにおいて、安楽するにはどうしたらよいか？

・行処ぎょうしょ— 身の振る舞いの心得、自身が処する心得。

・親近処しんこんしょ— 対人関係の心得、人に接する時の心得。

「口安楽行」— 法を説く時、悦びの心をもって説くには、どういう心得が必要か？

「意安楽行」— いつも悦びを感じ、その境遇に安穩であるにはどうしたらよいか？

「誓願安楽行」— 衆生を救うという誓願をまっとうするには、どうしたらよいか？

どうしたらいつも安らかに、誓願の成就に努力することができるか？

ぎょう しょ— しょうほうじっそう ふた い み 行 処— 諸法実相の二つの意味

(P243・4行/P185・2行)

第一は「すべては平等。すべての人間は仏性を持っている」「仏性の開発に努力」

第二は「差別相をありのままに観じ、千差万別の現象は起こるべくして起きた」

《患惟のひととき ②》

ここでは、『身安楽行』の中の『行処』のうちの、第二の「現象は起こるべき原因・条件があってこそ起こったものである」について考えたいと思います。

この「現象は起こるべくして起こる」とはどういう意味か？ ちょっと考えてみましょう。

『云何なるをか菩薩摩訶薩の行處と名くる。～忍辱の地に住し、柔和善順にし
て卒暴ならず、心亦驚かず、又復法に於て行ずる所なくして、諸法如實の
相を觀じ、亦不分別を行ぜざる。是れを菩薩摩訶薩の行處と名く』

(二四一頁 終四行)

忍辱の地に住し(怒ることもなく、驕(おこ)ることもなく)、柔和善順にして(我を張らず、真理に逆らわず、素直にしたがう)、卒暴ならず(行動に落ち着きがあり、荒々しくない)、心亦驚かず(何が起こっても慌(あわ)てない)、法に於て行ずる所なく(現象にとらわれて行動することなく、すべてのことは起こるべくして起こったと認め)、このような心構えで諸法実相を觀ずる。これが菩薩として大切な心得である《行處》というものです。(P241・1行/P183・6行)

《息惛のひととき ③》

「忍辱・柔和善順・卒暴でなく・心また驚かず・法に於いて行ずる所がない」という姿勢でいると、『諸法実相』を觀じることができる。と説かれています。
— では私は、これらの姿勢のなかで、①「どれができていますか？」
また、②「これから何を心がけようと思うか？」についてふりかえってみましょう。

親近するなどは

(P245・終5行/P187・1行)

これは「決して近づくな」という意味ではありません(あらゆる衆生を平等に救おうという大誓願を持たれる仏さまが「こんな人間に近づくな」などとおっしゃるはずがありません)。「親近」の意味は「何かを求めたり」「相手のご機嫌を取る気持ち」で近づくことで、それを戒めたものです。

仏さまとふたりづれ

(P259・7行/P197・終6行)

この「仏さまとともにある」、「仏さまと二人連れ」という気持ちこそは、信仰者のみに恵まれた、ひじょうに幸せな心境であります。～ こういう自覚があれば、まったく自然法爾(じねんほうに)の気持ちでいられます。～ これを任せきってしまえば、あとは自分に与えられた使命に向かって突き進んで行きさえすればいいのです。

《息惛のひととき ④》

『仏さまとふたりづれ』の項を読んで、何を感じましたか。かみ締めてみましょう。

『常に坐禅を好んで閑かなる處に在って其の心を修攝せよ』

(二四三頁 四行)

坐禅はだれにも必要

(P264・終2行/P201・8行)

『坐禅』とは、禅宗の人ばかりがやることではありません。仏教を学び、仏教を修行する者すべてにとって必要なことです。～ 静かに座り、乱れがちになる心をとりとめ (『修攝(しゅしょう)せよ』)、無我の境地に入ることができれば、それがすなわち坐禅です。これをやらなければ、学んだ教えも深く心に根をおろしません～ 宗教にとって欠くべからざる修行法となっているわけです。

《患惟のひととき ⑤》

「静かに座り、乱れがちになる心をとりとめ(『修攝しゅしょう・せよ』)」なければ、「学んだ教えも深く心に根をおろしません」と庭野開祖は説きます。

— 如何でしょう。私たちの一日でそうした『乱れがちになる心をとりとめる』(修攝しゅしょう)という時間を取っているでしょうか。

また、この庭野開祖の教えをあなたはどうか受け止めますか。深めてみましょう。

親近処とは

(P272・終2行/P207・終3行)

すべての現象は本来『空』であり、因縁所生のものであるのに、私たちはそれぞれの違いや、差別の面に目が行ってしまい、本来平等であるということに、なかなか思いが行かないものです。なぜかというと我々の見方が「顛倒(てんどう)」している、つまり本当の相(すがた)を正しくとらえていないからです。菩薩は因縁(縁起)を見極め、すべての物事を正しく観るという『空観(くうがん)』に徹することを対人関係の心得としなければなりません。～ 『空観』はつまるところ人間の本质(仏性)の平等をみることであり、その『平等』を悟るところに『自他一体』の実感が湧き、そこには『本当の慈悲』の発動があるからであります。

《患惟のひととき ⑥》

大事なポイントです。

「あらゆるものごとは、『因縁所生・縁起』で生じるものであり(起こるべくして起こった)、それが平等にはたらきかけている。この『平等』性を悟ることが対人関係の心得の重要な点であり、人間等しく『仏性』を具えているという『平等』を悟ることで、『自他一体』の心が湧き、そこから『本当の慈悲』の発動がある」と庭野開祖は説きます。

— このことをかみ締めて考えてみましょう。

く あんらくぎょう きが いや 口安楽行 — あら探しは卑しいこと

(P298・4行/P228・4行)

『他人の好悪長短を説かざれ』 (二四六頁 七行)

他人の良し悪し、長所・短所をあげて批判することを避けなければなりません。
— 世法においては、このような批判も必要ですけれども、信仰者はなによりもまず、『慈悲の人』でなければなりません。世間的な批判精神を超えた「寛容の精神」を持たなければならないのです。

人間の救いというものは、せんじ詰めれば「慈悲」です。～ (慈悲が) 交流するところに、安らかな人生があり、平和な社会があるのです。

「慈悲」とは胸をひらくことです。ひろやかな心で、相手を受け入れ、相手と一体になろうとすることです。

《患惟のひととき ⑦》

『他人の好悪長短を説かざれ』
— この経文を読んで、あなたは何を感じ取りますか？ かみ締めてみましょう。

たとえ或る人が現在は程度が低くても、未熟であっても、その人が懸命に努力している限り、～ 心ないけなし方をするのは、慎むべきです。大きな殺生であるといわなければなりません。 反対に、名ざしをしてその人の美点を賛歎するのは、世俗の修行の場合は、おおむねいい結果を生むようです。～ ところが、信仰者の場合は、賛歎の言葉がかえって増上慢を引き起こすことが多いのです。～ 信仰上の修行は、それほど厳しいものなのです。 (P302・終行/P232・2行)

《患惟のひととき ⑧》

「慈悲が交流するところに安らかな人生・平和な社会があるのです」、「『慈悲』とは胸を開くことです。広やかな心で、相手を受け入れ、相手と一体になろうとすることです」と庭野開祖は説きます。— このことを今の自分に当てはめると、具体的にはどのようなことを意味するのか？ また、どのような実践をすることなのか？ 考えてみましょう。

『亦名を稱して其の過惡を説かざれ。～ 又亦怨嫌の心を生ぜざれ』 (二四六頁 八行)

修行精進する人たちの過ち(失敗)を、名前をあげて非難するようなことがあってはなりません。また、人々を敵視する心を起こしてはなりません。— いつかは仏に向かって伸びるかもしれない芽を摘み取ってしまう、「大きな殺生」を犯すこととなります。

《患惟のひととき ⑨》

先の経文『他人の好悪長短を説かざれ』に続いて、『亦名を稱して其の過惡を説かざれ。～ 又亦怨嫌の心を生ぜざれ』と重ねて説かれています。
— なぜでしょう？ あなたはどのように受け止めますか？ 深めてみましょう。

さいこうをめざして やさしく説く

(P306・3行/P234・8行)

眞実の道・一仏乗の教えに基づいて、最高の智慧を得させることを目的として、説いてあげなければなりません。困難といえば、これほど困難なことはありません。しかし、そこをやり遂げるのが「菩薩の使命」というべきでしょう。

《患惟のひととき ⑩》

「人々を最高の智慧を得させることは、これほど困難なことはない。しかし、そこをやり遂げるのが『菩薩の使命』です」と庭野開祖は説きます。

— では自分は、その「困難」に負けることなく『菩薩の使命』を少しでも果たそうとしているか？ 『最高の智慧』を得ようと思っているか？ 振り返ってみましょう。

けちゅうみょうしゅゆ いみ 誓中明珠論の意味

(P350・終3行/P272・7行)

法華経は、全ての衆生を仏の悟りに導いて行こうというギリギリ最高の教えです。ですから、不意にその教えを聞いても、なかなか信じにくく、かえって逆の結果を引き起こさぬとも限りません。それゆえ、仏さまはあからさまには（法華経を）お説きにならず、今まで方便という衣を着せ、小出しにしてお説きになって来られたわけです。

きそてき しゅぎょう みょうきょう 基礎的な修行にこそ妙境あり

(P359・終4行/P278・終7行)

心を正しくし、人格を磨き、善い行いをしていくことが、信仰者として絶対に必要な基本的修行であります。～ 現実生活においても、信仰生活においても、基礎的な戒めや基礎的な修行を、けっしておろそかにしてはなりません。

《患惟のひととき ⑪》

「信仰をするうえで、心を正しくし、人格を磨き、善い行いをしていくことが、信仰者として絶対に必要な基本的修行であります」と庭野開祖は解説しています。

— では、私は「己の心を正しくし、人格を磨き、善い行いを実践していく」ということを、生活の基本にしているか？ 振り返ってみましょう。

『是の経を讀まん者は常に憂惱なく又病痛なく顔色鮮白ならん～天の諸

の童子以て給使を爲さん』 (二五五頁 五行)

潜在意識まで清める

(P374・4行/P290・終2行)

『又夢むらく國王と作って～菩提樹下にあつて師子座に處し～無上道を成じ

已り～涅槃に入ること煙盡きて燈の滅ゆるが如し』 (二五六頁 終二行)

お釈迦さまのご一生と同じ一生を、自ら経験する「夢」を見ることができる。
(仏さまと同じ境地に達することができるのです) 心の奥の奥まで清浄になり、慈悲深くなり、これは、いつも仏を念じていることの証拠なのです。

《患惟のひととき ⑫》

『四つの安樂行』を心がけると・・・「心の奥の奥まで清浄になり、慈悲深くなり、いつも仏を念じていることの証拠なのです」と、『潜在意識』まで清まることを庭野開祖は説いています。

— このことを、あなたはどのように受け止めますか？ かみ締めてみましょう。

《患惟のふいかえり まとめ》

今日の『安樂行品 第十四』の学びを通して、何を学び取ったか？
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) ふりかえってみましょう。

合 掌